



総踊りの形

総踊りには「花の大津」「大津音頭」の2曲が使われています。唄が完成した後、昭和48年に大津町日舞協会が設立しました。協会に所属する会員で話し合っ
て振り付けを考えました。その後、大津地蔵祭でも踊られるようになりました。

総踊りの振り付けは時代に合わせて変化してきました。日本舞踊には手の向きや足の使い方にルールがあります。その日舞的な要素を取り入れつつ、誰でも踊れるような振り付けにするため、平成初期に踊りの振り付けを見直しています。それ以降は、細かい動きの修正を加えつつも基本の形は変えずに踊られ続けてきました。

町内には日本舞踊を教える流派がいくつかありますが、日本舞踊の各流派の先生たちが大津町文化協会に参加し、日本舞踊の文化を継承しています。地蔵祭の総踊りは、各流派の先生がそれぞれの団体に踊りを教

みんなと踊れば自然と笑顔がこぼれる

踊り方は決まっています。今年は久しぶりに総踊りが行われるので、各流派の先生たちと集まって踊りの稽古を行いました。それから、流派ごとに踊りを教え、祭り当日を迎えました。

踊りで伝える大津の魅力

踊り方は決まっています。一番は町民の皆さんに楽しく踊ってもらうことが大切です。祭りの楽しい思い出はふるさとを想う気持ちとして心に残ります。これからも大津町の魅力を、踊りを通して伝え続けていきたいですね。

総踊り

継承人 03

たけなが みえ こ
竹永美重子さん

大津町文化協会（日本舞踊）の創設時から所属している。町内で日本舞踊を教える一人。



を理解し、魅力をより深く感じることにつながります。またそれは、伝統を守りつつも進化し続ける地域の力強さ、美しさに触れることでもあります。

伝統文化を学ぶことは過去を尊重し、未来につなげる手段であるとともに、私たちが大津町の宝を守る一員として大切な役割を果たすための重要な手掛かりでもあります。その道しるべの一つが、地蔵祭、梅の造花、総踊りといった伝統文化と言えるかもしれません。

継承人 02

肥後大津民芸造花保存会

しんかい こ
新開ツキ子会長

肥後大津民芸造花保存会の師範の一人



お地蔵さんのお供え物に梅の造花

昔、大津町で疫病が流行ったときにたくさんの子どもたちが命を落としていたそうです。今のように薬がない時代ですので、病気の治癒をお地蔵さんに祈願していたそうで、その時に梅の造花をお供え物として置いていたことから、お地蔵さんには梅の造花が欠かせないと聞いています。そのため、地蔵祭では会場に設置されているお地蔵さんの隣に梅の造花の展示を行っています。

地蔵祭と造花

嘉永三年（1850年）の寿賀廻舎日記に「鶴口地蔵、松古閑地蔵祭、生花、造花、色々造り物にて存外賑合い申し候」と記されています。この日記からも分かるように、鶴口や松古閑の地蔵祭で造花があり、そ

梅の造花

れより前に梅の造花は存在したと思われます。

地蔵尊の縁日（8月24日）に造花を並べて披露したのが現在の「地蔵祭と梅の造花」の始まりです。

自分だけの梅の造花

梅の枝は自然のものを使いますので、土台となる梅の枝の付き方や形次第でつばみや花びらを配置する場所が変わります。同じ物をつくろうと思ってもできません。同じように花を作っても、花びらの重なり具合や花の開き方で個性が出るので、自分だけの梅の造花を作ることができるのは魅力の一つですね。

伝統の継承

梅の造花は、大津町の町指定無形民俗文化財に選ばれています。大津町の宝を残し続けるためにも次の世代に広めていくことが私たちの役目と思っています。

梅の造花って？

つうそうし 蓮草紙というカミヤツデ（別名：つうだくぼく）からつくられる紙で花びらを、和紙で額を作ります。本物の梅の木に枝を接木し、枝に花びらと額をつけてできるのが梅の造花です。



町民の愛が次の世代につながる

3人の継承人に話を聞いて共通することがありました。それは、大津町の宝を残したいという「郷土愛」。子どもたちの成長を見守る精神が込められ、地域の連帯感を育んできた地蔵祭、細部に宿る芸術と美しさで人々の心を癒してきた梅の造花、日本舞踊の伝統を残し地域の一体感をつくる総踊り。この大津町の宝を町民の心に残ってほしいという願いが強く伝わってきました。

大津町にはこれら以外にたくさん宝があります。どの文化も今もなお大津町に息づき、時に変化をしながらもその核となる部分は守られています。それは、大津町の町民が伝統を大切にし、次の世代に引き継いでいこうという強い意志でもあります。

私たちがこれらの伝統文化を知ることは、ただ古い習慣を知るだけでなく、大津町の人々の思いや暮らし